

組織目標評価報告書（平成30年度）

部局名： **グローバル人材育成院**

部局長名： **佐野 寛**

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
④センター業務	
<p>④-1 目標</p> <p>グローバル人材育成院の目標は、全学部から選抜された学生へのグローバル人材育成の教育であり、彼ら・彼女たちが他の学生の先導役となることで、全学生への波及効果をもたらすことである。そのために効果的なカリキュラムなどの教育制度の整備を行なっている。人材育成院の専任教員2名は特徴のあるグローバル関連講義を提供するとともに、コース学生へのアドバイスを行なうことで、グローバル人材育成の目標を達成する。このような目標達成のため以下のような検証を行なう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年度から実施する新カリキュラムの効果について検証する。 ・平成29年度から4つのグループに分かれて履修するコース編成の教育効果を引き続き調査する。 ・平成30年度から導入予定の【学部・学科型】プログラムの円滑な導入。 ・グローバル人材育成特別コース生が各学部の先導的なグループとして全学に及ぼす波及効果について継続して検証する。 	<p>④-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年度から実施する新カリキュラムの効果について検証する。 グローバル人材育成特別コースは平成30年度からカリキュラムのグローバルコア1の開講科目を見直し、学部およびグローバル・パートナーズとの連携により、様々な分野から提供される教養教育科目から本区分にふさわしい授業をコースカリキュラムに盛り込むことで開講科目を大幅に増やす転換を図った。(平成29年度:19科目開講→平成30年度119科目開講) 履修環境が整備されたことにより学生は自分の専門も含め多様な科目から幅広く選択できるようになり、必要な教養を修得した上で海外留学へ臨む理想的な履修計画をめざす傾向が顕著にみられるようになった。また、履修と留学を併せた学修計画がたてやすくなったことにより、1年次から海外派遣プログラムへの関心が高まり、スタディ・アブロード部門が4月に開催した「夏期語学研修・夏期短期海外研修」説明会に多くのコース生が参加した。 ・平成29年度から4つのグループに分かれて履修するコース編成の教育効果を引き続き調査する。 1年次に対し、1年間のコース履修についてのアンケート(回答率83%)を実施、学生が意識した教育効果について調査を行ったところ、カリキュラムの異なる4種のグループ制度については90%以上が適切と回答、英語力養成プログラム(SPAcE)で英語力が伸びたと感じる学生は89.9%(大いに伸びた8%、結構伸びた20.5%、少し伸びた61.4%)で、英語プログラムと留学形式の異なる4種の新カリキュラムの導入については順調に実施できていることがわかった。今後はさらに学生のニーズを踏まえた授業科目の導入を検討したい。また、海外派遣による語学力の教育効果を測るため、平成30年11月及び平成31年1月にTOEICを実施、当該学生が3年次になる平成32年度に再実施し経年比較を行う予定である。 ・平成30年度から導入予定の【学部・学科型】プログラムの円滑な導入。 新たなプログラム「グローバル人材育成特別コース(学部・学科型)」について、部局との連携により、平成31年度開始(平成30年度以降入学者適用)をめざし運用の整備を行い、コース生の増員をめざす。 ・グローバル人材育成特別コース生が各学部の先導的なグループとして全学に及ぼす波及効果について継続して検証する。 グローバル人材育成特別コースでは、平成30年度新たに海外派遣プログラム「ミヤマーグローバルインターンシップ」を新規で企画・実施、本プログラムは文部科学省「日本留学海外拠点連携推進事業(東南アジア)」と連携することでコース以外の学生と一部の行程を共に活動させたところ、コース生の積極的に取り組む姿勢に影響を受け、活動全体が活気づき、ディスカッションやフィールド調査などで有効な教育効果がみられた。今後は全学への波及効果につながる要素や環境等について引き続き検証していく。
<p>④-2 年度計画との関連</p> <p>大学として定める中期計画の整理番号6と52では、グローバル教育体制の整備を目標としている。この目標達成のためには、グローバル人材育成特別コースの魅力アピールし、コース定員の増加に伴うコース履修者の安定的な確保、かつ、さらなる増加策に対応する必要がある。そのために、新カリキュラムの効果の検証、教育効果の調査を継続的に行なう。また、平成30年度からは学部・学科型という各学部の専門教育を従来通り充実させながらのグローバル教育を行なうプログラムを展開する。これまでの取り組みを新プログラムへ活かすことで、全学への波及効果を目指す。</p>	<p>④-2 大学全体への貢献</p> <p>グローバル人材育成特別コースはその設計段階から、大学全体への教育効果をもたらすことが期待されている。コース定員は設置当初の50名から段階的に100名まで増やし、平成30年度までの延べ履修者数は522名にのぼる。特に平成30年度はグローバル・パートナーズスタディ・アブロード部門と連携、本学が実施するグローバル化への取り組みについて一つのパッケージにまとめて入学時に戦略的にプロモーション活動を展開、本コースも従来の個別相談会から規模を拡大した説明会を実施、コースの魅力伝えるとともに海外派遣への意識付けを行い、第一次募集では定員を超える申請があった。また、本コースはグローバル・ディスカバリー・プログラムと並び、本学のグローバル教育の中核的役割を担っている。海外派遣をめざすカリキュラムは毎年度検証を重ね、英語力養成プログラムを通じて語学力を鍛錬したコース生は、本学および学外の多様な派遣プログラムに積極的に参加、本学の海外派遣の促進に大きく貢献している。さらにOne Young Worldなど国際的な課外活動への取り組みを推奨、活動成果は全学生が聴講できる授業や報告会等で発表することで全学の学生に影響を与えている。本コースはこれまで全学のグローバル化への先導的役割を担ってきたが、本学のグローバル教育が全学体制へすでに移行しつつある状況を鑑み、平成31年度開始に向けて各学局と連携、専門性を特色とした新たな教育プログラム「学部・学科型プログラム」を整備、さらなるコース生の増員および全学への波及効果をめざしていく。</p>
<p>④-3 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>グローバル人材育成特別コースの定員と現員 グローバル人材育成特別コースの学部等別履修申請者数 グローバル人材育成特別コースのカリキュラム表、シラバス、履修案内 グローバル人材育成特別コースのサマー・スプリングスクールと海外留学・インターンシップの整備状況 グローバル人材育成特別コース履修者に対するアンケート グローバル人材育成特別コース履修者のG-TECまたはTOEIC L&R-IP点数 グローバル人材育成特別コース履修者の単位修得状況</p>	<p>定員と現員:定員を超える応募があった。 学部等別履修申請者数:本年度は12部局から111名の申請者があった。 カリキュラム表、シラバス、履修案内:いずれも様式等を全面的に改善した。 サマー・スプリングスクールと海外留学・インターンシップの整備状況:整備した。 アンケート:1年次と4年次を対象にアンケートを実施、分析した。 GTEC AcademicまたはTOEIC L&R点数:1年生についてGTECを4月、12月、TOEICを11月及び1月に実施し、GTECにおいては平均点の上昇がみられた。 単位修得状況:4つのグループ制導入に伴い、英語の事前履修希望登録を新たに取り入れたことにより、年間を通じた履修計画をたててコースの学修に取り組めるようになった。また3学期に細やかな履修指導を行った結果、特に1年次において良好な単位修得状況となった。</p>
【総括記述欄】	
<p>平成30年度、グローバル人材育成特別コースは全部局の国際化を目指し、従来のコース定員はそのままにしつつ、「学部・学科型プログラム」を設置した。部局の協力を得るためにグローバル人材育成院が果たした役割は大きい。従来のコースが先導的役割を担うとするならば、新たに開設した「学部・学科型プログラム」は学部のグローバル化への契機であり、2つのプログラムが織り成す重層構造は全学体制でのグローバル教育の基盤となること期待できる。グローバル人材育成特別コースのカリキュラムについては、平成29年度以降、グループ制の導入やSDGsにも対応した「異文化理解」、「日本文化理解」、「新世紀の自然と科学」の編成とするなど、抜本的な変革を断行してきた。平成30年度は本格運用の年度で、加えて学習支援にも重点を置き、きめ細やかな履修指導を行い、学生の学習状況の把握に努めた。その結果、カリキュラムが抱える課題や学生のニーズが比較的リアルタイムで把握できるようになり、改善に向けた速やかな対応へとつながった。さらに、従来、コース生の海外派遣を支援してきた奨学金制度を見直し、平成30年度入学者からは独自の支援金給付を支援金制度を止め、全学の支援制度へ一本化した。長期留学については支援がなくなったものの、むしろ学内外の多種多様な派遣プログラムに対するコース生の内発的な意欲を促すことができ、本学の海外派遣の増加に貢献した。以上のように、平成30年度は、カリキュラムの質的な転換と、学生の意識の変化を促すことができ、かつ、海外派遣の増加と全学の国際化に貢献できたことから達成度を4とした。</p>	